第2章

生理作用における奇経八脈の役割

経絡は，鍼灸医学の拠りどころであるだけでなく，中国伝統医学史上における最大の発見であり，最も特異的な業績です。中国伝統医学は鍼灸学・方剤学・推拿学などによって構成されていますが，経絡はその理論の礎なのです。

身体内における経絡の役割は，臓腑の生理作用に直結しその働きを全身に伝達することと経絡学では理解されています。日本の鍼灸界においては，奇経八脈は臓腑に属さないと考えられがちです。そのため，生理作用における奇経八脈の役割について論じられることはほとんどないのが現状です。しかし，中国伝統医学においては，奇経八脈は「肝腎に属す」や「腎に属す」といわれています。また奇経八脈の陰経脈は，流注上も腎や腎経と密接な関係をもっています。このことを踏まえると，生理作用における奇経脈の役割は，腎の生理作用を根底に置いて考えるのがよいといえます。

現在，経絡学における奇経八脈の研究は，正経脈ほど進んでいないといえます。このため，まずは生理作用における奇経八脈の役割を明確にすべきと考えます。さらに，これを土台として奇経学の基礎理論と治療理論をもっと高度に積み上げていくことが，今後の中医学の課題です。そのための一助となるように，本章では，奇経八脈の生理機能に関わる役割について論述してゆきます。

1　奇経八脈の生理作用

1．正経十二経脈と奇経八脈について

中国伝統医学では，経絡はその帰属する臓腑が先天的に蔵している精や後天的に生成した

気血津液を身体に供給するためのパイプラインと考えられています。気血津液は人体の生命活動を維持する物質であり，この気血津液が皮肌部・経筋・骨・五臓六腑など全身を循行して各器官を栄養・滋潤しています。正経十二経脈は六臓六腑に帰属しており，経脈中には六臓六腑が蔵している精や臓腑によって生成された気血津液が流れています。また，正経十二経脈系統（絡脈・経別を含む）は，臓腑間を連絡し，互いの生理作用を補い合っています。

奇経八脈も同様に，五臓六腑において生成された気血津液や胞宮からの先天的な精（性ホルモンのようなものと理解してください）を身体にくまなく供給することを担っていると考えられています。

正経十二経脈については，上記のように理論は構築され，流注とともに幅広く理解されています。しかし，奇経八脈の流注や生理的役割は，どれだけ理解されているでしょうか。『難経』二十七難に「脈に奇経八脈あるも，十二経に拘（かかわ）らざるのは，何の謂ぞや」とあるように，奇経八脈は正経十二経脈に属さずに，独立した流注構造を取っているとされています（陰維脈と陽維脈に関していえば，正経脈を維絡しているため，正経脈に属しているともいえます。しかし，両維脈は流注的には正経脈に属していても，三陰・三陽経の連結をおのおの強める絡脈の役割をしています。したがって，両維脈は正経脈にはない生理的な働きをもつ独立した機構といえるでしょう）。

また『難経』二十七難には「聖人は溝渠を図り設けて，水道を通利し，以って不然に備う，天より雨降り下りて，溝渠は満溢す，……」とあります。この『難経』の文章からは，奇経八脈の働きは「身体の病邪の勢いが盛んになり正経脈から溢れ出たときの受け皿」と受け取られてしまいます。たしかに，病邪は正経脈から奇経脈まで侵入し，その病勢が広まる場合があることは否定しません。しかし，これはあくまで病態がある場合の話です。奇経八脈は，病邪のためにあるわけではありません。身体が正常なときに，どのように生理作用に関与しているのかを考えることが重要です。そのために，奇経八脈はどこに帰属し，奇経八脈中には何が流れているかを述べてゆきます。

2．奇経八脈が帰属する臓

中国伝統医学においては古くから「奇経は肝腎に属する」または「奇経は腎に属する」といわれてきました。

奇経が肝腎に属するという見解を導き出した根拠は，おそらく以下のようなものです。

①督脈・任脈・衝脈の３脈は，生殖器に直接関係した経脈ということから。そして生殖機能の根源は腎であると解釈されているから。

　有名な「一源三岐説」から，督脈・任脈・衝脈の３脈は「胞宮」に帰属していると考えられてきました。「胞宮」は，奇恒の腑と呼ばれるものの一つで，具体的には，女性では子宮・卵巣，男性では精巣を指しています。

②奇経脈は生殖器と密接な関係があり，肝経は外生殖器を循行するから。

③陰蹻脈や陰維脈の起始穴が，足の少陰腎経から始まっているから。

④陽蹻脈や陽維脈の起始穴が，足の少陰腎経と表裏関係にある足の太陽膀胱経から始まっているから。